

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
1	イトウケ 伊東家		源頼朝の側近で「曾我兄弟の仇討ち」で有名な工藤祐経を祖とし、その子祐時から伊東を名乗る。室町時代に伊豆から日向国に下向、日向一円に勢力を拡大した。南九州の覇権を争って島津氏と対峙するも、元亀3年に大敗して一時日向を追われる。豊臣秀吉の島津征伐の戦功により飢肥藩域を受領して日向に復帰、江戸時代を迎え、廃藩置県までの25代約500年間、清武地域を領した氏族である。
2	ミヤタアキノカミヨシタケ 宮田安芸守儀武	清武	永正16年(1519)～永禄5年(1562) 天文年間、当事島津氏が占領する飢肥城を奪取するため、伊東義祐は兵を進め、一進一退の攻防が繰り返された。宮田安芸守は武将として活躍し、飢肥を確保した永禄5年の合戦で戦死した。
3	イナヅカモンノスケシゲマサ 稲津掃部助重政	清武	天正2年(1574)～慶長7年(1602) 19歳で初代飢肥藩主祐兵の小姓となり、25歳で家老職、さらに清武城主となった武将。関ヶ原の合戦時、日向にあって豊臣方高橋氏の宮崎城を攻め取って戦功をあげたが、このとき高橋氏が徳川方に寝返っていたため、その責任を一身に受けることになり、立て籠もった清武城で自害した。
4	マツイ ゴロベエヨシナガ 松井 五郎兵衛儀長	清武	天正12年(1584)～寛文11年(1671) 干ばつに苦しむ田吉、恒久、北方、南方の人々のために、灌漑用水の確保を模索、大淀川と清武川の満潮逆流に注目して、清武川からの導水確信。水路開削を飢肥藩主に陳情し、難所「須田木の岡」の開削にも成功して、延長約4kmの「松井用水」を完成させた。
5	イノウエ シンカイ 井上 真改	木花	寛永7年(1630)～天和2年(1682) 熊野村西教寺生まれの刀匠藤原和泉守国貞の次男。父の代作を経て2代目国貞を襲名、後に真改と改名した。大阪政宗とも称される名工で、朝廷より菊紋の使用を許された数少ない刀工のひとり。他家の高禄での招抱えを辞し、100石で伊東家に仕えた。
6	ヤスイ ソウシュウ 安井 滄洲	清武	明和4年(1767)～天保6年(1835) 上中野に生まれる。諱(伝)は朝完、字を平右衛門、滄洲はその号。幼少から学問に励み、若くして江戸の古屋昔陽、京都の皆川淇園など古学派の学者に師事した。自宅や地頭所で教育を開始、清武郷校「明教堂」建設の機運を高め、郷校設置後は次男息軒とともに清武の子弟教育に専念した。後に再興された藩校「振徳堂」の初代総裁となり藩の学問の新興に寄与した。
7	オチアイ ソウセキ 落合 雙石	飢肥	天明5年(1785)～明治元年(1868) 飢肥に生まれ、名は子載、通称鉄五郎又は敬介と称する。長崎、京都、江戸の昌平坂学問所で学び、飢肥藩に帰郷後、振徳堂教授及び藩主伊東祐相の侍読となる。晩年は大坂に住み文業を楽しむ。著書に「鴻爪集」「論語統」などがある。
8	スギタ シンザエモン 杉田 新左衛門	木花	寛政元年(1789)～安政2年(1855) 熊野村島山に生まれる。寛文2年に起こった外所大地震により海没した水田を復活させるため、文政年間に高さ約3m、延長2kmに及ぶ堤防を築いた。これにより約60ヘクタールの水田は美田となり、安定した収穫をもたらした。
9	クロキ シンザエモン 黒木 七左衛門	清武	寛政5年(1793)～明治6年(1873) 旧幕府領、船引村の庄屋。若くして庄屋となり、清武川の河川改修を行い、また、水利の悪さから水田耕作が困難であった正手地区に隧道を開削して水路を通し、稲作の利便性を向上させた。さらに葬祭等の悪習の改正等村民の福祉の向上に貢献した。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
10	ヤスイ ソッケン 安井 息軒	清武	寛政11年(1799)～明治9年(1876) 幼少の頃から学問に傾倒し、元服までに家の蔵書を読み上げ、近隣に書を求めた。21歳で大坂の篠崎小竹、25歳から江戸の昌平坂学問所で苦学した。帰郷して郷校明教堂、藩校振徳堂の助教として父滄洲を助け、40歳で江戸に移住して「三計塾」を開く。文久2年に幕府儒官を拝命し、昌平坂学問所教授に、元治元年には飢肥藩を凌ぐ6万3千石の奥州塙の代官に任命される。生涯を学問と人材育成に捧げ、新時代の幕開けに活躍した約2,000名の人材を輩出した。明治9年9月23日、77歳で江戸に没し、千駄木養源寺に葬られた。
11	阿万 豊藏	清武	文化7年(1810)～明治9年(1876) 中野に生まれ、安井滄洲・息軒に師事した後、江戸の昌平坂学問所で学んだ。帰国後明教堂・振徳堂の教授となり、明治維新後は小参事司教局総裁になった。
12	ヤスイ サヨ 安井 佐代	清武	文化9年(1812)～文久2年(1862) 安井息軒の妻。清武岡の川添家に生まれる。「岡の小町」と称される程容姿端麗で、16歳で息軒の妻となる。献身的に息軒を支えたその姿は、森鷗外の小説「安井夫人」で紹介されている。夫息軒の幕府儒官拝命を目前にした文久2年、51歳で江戸で病死した。
13	ヒラベ キョウナン 平部 嶺南	清武	文化12年(1815)～明治23年(1890) 字を温卿、通称良介という。清武中野の和田家に生まれ、18歳のとき飢肥の平部家の養子となる。明教堂で安井息軒に師事し、以後息軒を生涯の師と仰ぐ。昌平坂学問所で学んだ後、振徳堂の教授、山方奉行、番頭、家老と栄進し、明治維新の際には大参事となった。著書に大著「日向地誌」がある。
14	ミナミムラ タイソウ 南村 鼎三	赤江	文政9年(1826)～明治31年(1898) 赤江城ヶ崎に生まれる。明治3年頃に共有林約4ヘクタールを開墾して桑畑を開き養蚕業を始めた。座繰製糸場を設けて生糸を生産、その製品を横浜に運び海外輸出の道を開くなど、養蚕業の振興に大いに貢献した。また、教育の振興にも熱心で赤江地方の教育の基礎を築いた。
15	ユジ ツネソウ 湯地 平生三	清武	天保元年(1830)～明治32年(1899) 清武加納に生まれ、飢肥藩の勘定方物産係を拝命、明治維新後は地租改正顧問、勸業委員、戸長、宮崎県第七大区副区長、清武商社長を歴任し、幕藩体制から明治という民主主義社会への大転換期に社会の安定をめざして活躍した。
16	ヤノ ゲンジロウ 矢野 源次郎	清武	天保3年(1832)～明治42年(1909) 栃木県宇都宮市大工町に生まれる。養蚕業に精通し、加江田に蚕室を設け、近隣に養蚕業を広めると共に城ヶ崎に製糸場を建てて指導に当たり、養蚕新興の基礎を確立した。
17	モリナガ ナスオ 守永 南州男	赤江	天保8年(1837)～明治32年(1899) 赤江に生まれ、幼少にして学問を好み、学識高く、後に私塾を設けて有能な青少年を教育し、数多くの名士を輩出した。また赤江村初代村長に就任し、以来35年間その職にあつて赤江進展の基礎を確立した。
18	ツダ サダエ 津田 貞衛	清武	弘化元年(1844)～明治45年(1912) 清武の中野に生まれる。明治初年に折生迫村の庄屋を命じられ、後に折生迫村戸長に任命された。明治5年に村に塾を設立し、後に明治政府の「学制」に基づき村塾を紫波洲崎小学校(現在の青島小学校)と命名、教育の大切さを説いて就学を盛んに勧め、文教の道を広めた。
19	コジョウ ゴンペイ 小城 権平	清武	嘉永元年(1848)～昭和5年(1930) 新町に生まれる。新町区長を務め、教育の重要性和将来の教育予算を洞察し、学校基本林の必要性を説いた。率先して自己所有の山林約3町歩を村に寄付し、村民はこれに感動し隣接地を購入して膨大な町有林が誕生した。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
20	カワゴエ ススム 川越 進	清武	嘉永元年(1848)～大正4年(1915) 木原に生まれ、明治5年に戸長助役に就任、西南の役に従軍後、鹿児島県雇いとなり、明治13年県議会議員に当選した。長年にわたり本県の分県運動に努力し、明治16年に県議会議長に就任すると宮崎県の分県に成功した。分県後の県議会議長となり、後に第1回衆議院議員に当選、以来連続5回当選して本県の発展に寄与した。
21	ナガトモ ヤスオ 長友 安雄	青島	嘉永5年(1852)～明治44年(1911) 青島村折生迫に生まれる。明治27年に青島神社の社掌となり、鶴戸神宮の禰宜を兼務した。また青島の亜熱帯植物の保存と育成に尽力し、観光青島の基礎を確立した。
22	ヨシナガ シンゾウ 吉永 新藏	青島	安政2年(1855)～明治26年(1893) 青島村折生迫に生まれる。明治4年に折生迫で初めて鱸延縄(ワカエナワ)を試み、好結果を得ると、これを奨励し、漁具と漁法の改善、中国輸出用のフカヒレの製造を進めるなど漁業の進展に貢献した。
23	マツダ シュウゾウ 松田 拾藏	青島	安政3年(1856)～昭和11年(1936) 折生迫に生まれる。初代青島村長として村政の基礎を確認した。又郡会議員となり、郡政にも貢献さらに青島神社の改築、ビロ-樹製土産の開発など産業の振興に寄与した。
24	クロキ シゲイ 黒木 重家	清武	安政4年(1857)～昭和11年(1936) 木原に生まれ、明治28年に清武助役、ついで村長に就任し、基本財産の構築、農桑植栽の勧誘、就学奨励などにつとめた。また、納税規約を定め、滞納を一掃した。明治36年に藍綬褒章を授与した。
25	ヤスイ コタロウ 安井 小太郎	清武	安政5年(1858)～昭和13年(1938) 安井息軒の長女須磨子と志士北有馬太郎の長男として江戸に生まれる。北有馬太郎が捕縛され獄死すると、母、妹と共に帰郷し、清武の大久保に暮らす。後に上京し、勉学に励み、祖業を継承して学習院、一高、北京大学堂等で50年余り教鞭をとり教育に貢献した。朴堂と号し、斯文会などに参与して現代漢学会の泰斗と称された。
26	ナガトモ アントン 長友 安敦	清武	安政5年(1858)～昭和7年(1932) 中野に生まれる。父の田野地頭就任によって田野に移住する。明治7年上京し、安井息軒の三計塾に学び、帰郷後清武、田野、大淀の小学校で教鞭をとる。明治22年の町村制施行の際、初代田野村長に就任、以後3代、4代の村長に就任し、十二年間村政に尽力した。
27	スギタ ヒサタロウ 杉田 久太郎	青島	文久4年(1864)～明治24年(1891) 青島村折生迫に生まれ、漁労を生業とする。明治22年漁業組合頭取に選出されると遠洋漁業に将来性を見出し、漁場を開拓した。朝鮮半島近海に出漁した際、病気となり、29歳の若さで釜山に客死した。明治中期の朝鮮半島近海への出漁の先駆者である。
28	アラタケ タミゾウ 荒武 民三	清武	元治元年(1864)～昭和17年(1942) 中野の和田家次男として生まれ、荒武家の養子となる。明治15年、清武小学校の教員となり、その後、森林監主として農商務省に勤めた。後に清武村長、村農会長となり、土木、産業、教育、基本財産の造成等に尽力した。
29	ワタナベ コウサク 渡辺 幸作	木花	慶応元年(1865)～昭和4年(1929) 鏡洲出身。明治19年以降農事試作委員、農事試験委員、青年会長、学事奨励委員、学校保護会長などを歴任し、社会教育及び農林業開発に大きく貢献した。教育功労者として宮崎郡教育会から、また、山林植栽の功績顕著として宮崎県山林会から表彰された。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
30	コウツマ ミツジ 高妻 満次	青島	慶応元年(1865)～昭和20年(1945) 折生迫に生まれる。教師となり、校舎移転や野島分教場設置に尽力した。内海郵便局長を経て、大正3年に青島村長となり、当時の貧困財政における納税の必要性を説き村政に尽力し、文教・産業の奨励指導に努力した。
31	イシグロ テイイチ 石黒 貞一	木花	明治元年(1868)～昭和11年(1936) 熊野に生まれる。若くして青年会長、消防組頭として活躍。明治40年に木花村長に就任、学校の新築、道路改良などに尽力するとともに、植林事業を奨励して基本林を育成し、また、漁業組合長、養蚕組合長として産業創設に貢献した。
32	ナガトモ ヤスマサ 長友 安昌	田野	明治2年(1869)～昭和20年(1945) 下屋敷に生まれる。明治40年、田野村長に当選、同44年に県議員に当選し連続6期、その他の公職に就き、植林事業を奨励、国有林の部分林設定、学校基本林の造成に貢献した。
33	ユジ コウヘイ 湯地 幸平	田野	明治3年(1870)～昭和6年(1931) 築地原に生まれ、日本大学を卒業後、高等文官試験に合格。台湾警視総長、福井県知事、警保局長を歴任、後に貴族院議員となり帝国教育会議長など多くの重責を歴任した。
34	イワキリ ハウサ 岩切 莠	清武	明治3年(1870)～昭和19年(1944) 加納に生まれる。大正13年に村長となり、3期にわたって村政に携わり、その間、山林250町歩を村基本林として確保し、村財政の基礎をつくる等村政に貢献した。
35	ハラダ ヨシノリ 原田 義教	赤江	明治7年(1874)～昭和35年(1960) 城ヶ崎宝泉寺に生まれ、住職として努める傍ら、宮崎県釈放者保護会を設立して、釈放者の更生保護に努めるなど地方教化事業に貢献した。また、赤江振興会を設立し、赤江地区の振興を図った。
36	ミヤガワ ミツノリ 宮川 満徳	清武	明治9年(1876)～昭和26年(1951) 岡に生まれる。明治34年清武村役場に奉職、後に県農事試験場に勤務。農事試験場で水稲・大豆の改良に貢献した。村会議員、郡農会長、県会議員長等を務め、町有林の設定、清武隧道問題などに尽力し、産業の発展に貢献した。
37	ユジ サダナリ 湯地 貞成	清武	明治9年(1876)～昭和36年(1961) 岡に生まれ、清武信用組合長として農家経済の立て直しをはかり、負債整理組合を設立し、長期低利の資金の導入に努力。治山治水にも意を用い、産業の発展に大きく貢献した。
38	マツダ コウヘイ 松田 幸平	木花	明治13年(1880)～昭和7年(1932) 熊野に生まれる。村会議員、郡農会長、郡会議員などを歴任、大正8年から同12年まで木花村長を務め、農業の改良普及や地方自治の進展に尽力した。特に、多雨の時季には水が退かず稲作には困難な水田が多くあった正蓮寺平野の耕地整理に尽力され、約200haに及ぶ耕地整理を完成させた。
39	スズキ セイジ 鈴木 清司	青島	明治17年(1884)～昭和55年(1980) 青島に生まれる。県師範学校卒業後22年間教職にあつて、子弟の教育に専念。その後、村長として貧困な村政の立て直しに心血を注いだ。郷土誌『青島』の刊行にも資料提供等大いに貢献した。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
40	イシグロ タカシチ 石黒 高七	木花	明治19年(1886)～昭和19年(1944) 熊野に生まれ、宮崎郡農業技手として精励。木花村助役続いて木花村長となり、自作農の創設、小学校の移転改築等に尽力し、農業会長、産業組合長となり村政に功績を残す。
41	コバエ ナオザブロウ 小八重 直三郎	青島	明治19年(1886)～昭和36年(1961) 青島に生まれ、判事として各裁判所に勤務。宮崎地方裁判所の調停委員、司法委員を務める傍ら、社会教育委員、児童福祉審議会委員をして郷土の社会教育に大いに貢献。
42	オチアイ ジュウキチ 落合 重吉	赤江	明治20年(1887)～昭和21年(1946) 田吉に生まれる。農商務省九州支場養蜂主任技手となり、清武村農会技手、赤江村助役、全国養蜂協会会長等を歴任し、その間、日向南瓜、胡瓜、トマト、甘藍等農業の改善と振興を図った。
43	ヒダカ タダシ 日高 正	清武	明治21年(1888)～昭和55年(1980) 木原に生まれ、長崎医学専門学校を卒業し医院を開業。以降昭和30年まで40年間の長きに渡り清武町の医療、保健、衛生に多大なる貢献をした。その傍ら、村議員、町制施行後は町議員、清武小学校・中学校のPTA会長等を務め、卓越した見識と情熱で医療、福祉、教育、土木など、町政の充実振興に貢献した。清武町名誉町民。
44	オグラ キュウハチ 小倉 久八	木花	明治22年(1889)～昭和42年(1967) 木花に生まれ、長期に渡り村議員、議長として木花村政に貢献した。その間、地域の経済の安定、産業教育の振興に寄与すること甚大であった。木花中学校の建設に当たっては、多額の私財を投じて教育振興に力を尽くし、木花、加江田、鏡洲に保育園を設立し幼児保育の充実にも専念した。
45	ウエノ エイゾウ 上野 栄藏	田野	明治22年(1889)～昭和49年(1974) 田野学ノ木に生まれ、田野村議会議長、町議会議長として、田野行政の発展に尽くした。郷土の発展のために道路の開発を重視し、県議員時代に九州縦貫道の建設に熱心に取り組み実現に導いた。また、自己所有地1ヘクタールを戦没者慰霊塔用地として町に寄贈した。
46	ツダ シゲル 津田 茂	田野	明治24年(1891)～昭和40年(1965) 木花に生まれる。東京農業大学に進学し勉学に励み、帰郷して郷里の発展に尽くした。田野村長、県議員等を歴任し、青年教育の振興や県政の発展に貢献した。また、学識と経験から県司法保護委員会参事となり民生の安定に尽力した。
47	カワゴエ イシオ 川越 石男	木花	明治34年(1901)～平成10年(1998) 熊野に生まれ、宮崎県庁職員として30余年在職、県議会議員として20年間奉職、議長として県政発展に尽力した。また、双石山、加江田溪谷の自然保護運動に取組み、当該地域一帯を鰐塚山県立自然公園に編入することを実現した。議員辞職後は、県自然保護管理協議会議長を務め、自然保護や郷土保全に尽力した。
48	カワサキ サダオ 川崎 貞男	木花	明治34年(1901)～平成15年(2003) 木原に生まれ、海軍に入隊し、終戦後は戦没者の慰霊のために戦没者墓地の建設を行った。宮崎学園都市建設に当たっては、宮崎大学移転協力会会長、学園都市建設協力会会長を歴任し、地元有志の理解と協力を進め、学園都市の実現に大きく貢献した。また、木花振興会会長、木花福祉会会長などを務め地域貢献に尽力した。
49	ミワ タダヨシ 三輪 忠珍	青島	明治41年(1908)～昭和31年(1956) 住吉に生まれる。京都大学大学院を卒業後、現宮崎大学農学部の教官となり、日向夏みかんの受粉受精現象と落果問題で農学博士の学位を取得。宮崎県文化賞を受賞した。

先人廟合祀者(清武郷先人祭 顕彰者)功績

生誕順

No.	氏名	地域	功績
50	イワウラ ハヤミ 岩浦 逸美	清武	大正4年(1915)～昭和36年(1961) 木花に生まれる。昭和18年日本大学政治学科に進学したが太平洋戦争が激化、翌19年に帰郷、戦争末期の困難な時代に清武村助役となった。その後、農業会会長、村長を経て、昭和25年初代町長となる。県議会議員を3期務め、清武小学校のPTA会長としても力を尽くし、公私にわたって地域に貢献した。
51	ナガトモ ヤスモリ 長友 安盛	清武	大正4年(1915)～平成20年(2008) 船引に生まれる。戦後復興期から高度経済成長期にかけて、農業組織の指導者として、農家の経済的安定と生産基盤の確立に努め、今日の農業の発展に大きく貢献した。また、宮崎中央農業協同組合の設立を進め初代の組合長理事に就任、全国農業協同組合連合会理事も務め、農協系統機関の組織整備、運営の充実のために尽力した。清武町名誉町民。
52	ヤマダ ミヨシ 山田 美義	清武	大正5年(1916)～昭和59年(1984) 加納に生まれる。町議を5期務め、その間女子短大、三和電気の誘致、八重川の改修等に多大な功績を成し、その後、県議として4期連続当選するも4期目の5月、急逝した。
53	サトウ カイチ 佐藤 嘉一	木花	大正6年(1917)～昭和55年(1980) 熊野に生まれる。県農業関係機関の役職に就き、清武、赤江、木花の組合合併を推進し、南宮崎農業協同組合を発足させた。また、市郡4農業共済組合の合併も実現させた。
54	ツネヨシ マサオ 恒吉 政男	赤江	大正7年(1918)～昭和52年(1977) 恒久に生まれ、市議会議員在任中、小戸橋、大淀大橋の完成を実現させた。市消防力の基礎を築き協会長賞を受賞。市体育協会の要職も務め、スポーツの発展に貢献した。